九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本語フォリナー・トークにおける語彙の修正に関する一考察

池田, 隆介
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494454

出版情報：比較社会文化研究. 4, pp.31-38, 1998-10. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『比較社会文化研究』第４号（1998）31～38頁
Social and Cultural Studies
No.4（1998）, pp.31～38

日本語フォリナー・トークにおける語彙の修正に関する一考察

池　田　隆　介

０．はじめに

Foreigner Talk（以下，ＦＴ）とは「ある言語の母国語話者がその言語を外国語あるいは第二言語として話す者と意志疎通を図るときに使う，何らかの修正の加わった特殊な話し方」(志村 1989：204)，すなわち，非母語話者(Non-Native Speaker，以下ＮＮＳ)を相手とする場合の母語話者（Native Speaker，以下ＮＳ）の話し言葉を指す。すでに先行研究が多種多様な「何らかの修正」の存在を報告しているが，その中でも，本研究では「語彙」の問題に焦点を当てて論ずる。

ＦＴにおける語彙の修正の存在は，先行研究ですでに発見されており，修正のしかたによって「別の単語で言い換える」「英訳する」「繰り返す」というようなパターンに分類されている（スクータリデス 1981，88，志村 1989，坂本 1989)。従来の研究は，語彙の修正の存在，及び，語彙の修正のしかたが数パターンに分類されることを確認しているが，本研究では，発見された多様な修正のパターンに反映される日本語ＮＳのＮＮＳにとって理解しやすいインプットとはどのようなものかについての意識を考察する。本研究は，日本語ＦＴの語彙の修正を通じて，どのように語彙を修正すればＮＮＳが理解できるようになると日本語ＮＳが考えているかを解明することを目指している。

近年，Long らの一連の研究（Long 1981，1982，1983，Long and Sato 1983）に代表されるように，ＦＴにおけるインタラクション面の修正と理解可能なインプット(Comprehensible input）との相関の高さに着目し，ＦＴの第２言語習得促進効果に関心を寄せたＦＴ研究が盛んである。これに対して，本研究は，ＦＴのコミュニケーション促進効果に注目し，ＮＮＳの理解を促進するために，ＮＳがどのような語彙の修正を施すに至ったかを探求することを目的としている。従来の研究は「習得」というＮＮＳの側の問題に焦点を当てているが，本研究は，接触場面で母語を使ってＮＮＳに意思を伝達するにはどうすればよいと思っているかというＮＳの側の問題に焦点を当てている。

本研究の目的は，どのような語彙の修正がＮＮＳの理解の促進に役立つとＮＳが考えているか，つまり，「理解可能なインプット」に関するＮＳの意識を考察することにある。そのためには，研究の焦点が異なる従来のＦＴ研究のアプローチをそのまま本研究で用いることはできない。まず，本研究の目的を達成する上で従来のＦＴ研究の方法論では不十分な点を指摘し，次に，指摘した問題点を解決するべく「仮想講義」という調査方法を用いてデータを収集し，ＮＳがいかにしてインプットの理解可能化を図っているか，その実態に迫る。

１．従来のＦＴ研究における方法論上の問題

本研究は，どのように語彙を修正すればＮＮＳの理解を促進できるＮＳが考えているかを解明することを目的としている。この目的を達成するにあたって，従来のＦＴ研究の方法論では不十分な点が二つある。この章では，従来の方法論ではの不十分な点――「理解の成立過程と成立要因との混同」と「ＮＳの目的達成意識の希薄さ」との２点について説明する。

１．１　理解の成立過程と成立要因との混同

「理解可能なインプット」に関する日本語ＮＳの意識を探求するにあたって，従来のＦＴ研究の方法論では不十分なの一つとして，理解の成立過程であるインタラクション面の修正と理解の成立要因とを混同していることが挙げられる。

Krashen のインプット仮説が提唱されて以来，言語の習得には理解可能なインプットが必要であるという考え方が浸透し，理解可能なインプットをＮＮＳが得るためにはＦＴのインタラクション面の修正が不可欠であるとの主張が支持されるようになった(Long 1981)。しかし，インタラクションの量はインプットが理解可能になるに至る過程の長さを示しているだけで，これを「インプットが理解可能になったのは，ＮＳが何をしたからなのか」という理解を

可能にした要因とみなすことはできない。

何度も交渉を繰り返す必要があり，ＮＮＳが理解に至るまでの過程が長くなったインプットより，短い過程で理解可能になったインプットの方が より「理解しやすい」インプットであるといえる。したがって，インタラクション面の修正によるインプット量の増加が直接の理解可能要因となっていると認めることはできない。インタラクション面の修正と理解可能なインプットとは，相関関係が高いことは認められても，因果関係を証明することはできない(Ellis, Tanaka and Yamazaki 1994)。インタラクション面の修正と理解可能なインプットとの関係を再考することは，ＦＴ研究の最新の課題の一つとして提出されるべき問題である。

本研究は，インタラクションがＮＮＳの理解に大きく貢献していることを否定するものではない。インタラクションはインプット量を増やし，身振り・表情・字を書いたり絵を見せたりするといった視覚的なサポートなど，コミュニケーションを成功させる強力な非言語的手段を利用できる機会も多くするので，理解可能なインプットを効率よく生産できる環境を整えてくれる。しかし，インタラクション面の修正を無制限に施せる環境では，ＮＮＳの理解が成立するまでの長い過程の間に，理解の成立要因となりうる手がかりが過剰に生産されてしまう。インタラクション面の修正に制限を設けていない従来の方法論で集めたデータには，理解を成立させたと考えられる要因が過剰に含まれてしまい，決定的な理解可能要因を特定することが難しいという問題がある。

インタラクション面の修正が過剰に発生することを防ぎ，発話の理解の手がかりとなる要因を制御できるデータ収集，および，仮説検証の方法を本研究では用いる必要がある。

１．２　ＮＳの目的達成意識の希薄さ

従来のＦＴ研究に用いられた話し言葉のデータは，話すためだけに話す，あるいは，データ集めのためだけに話しているものがほとんどで，話している内容をＮＮＳに理解させようというＮＳの意識が低い。これが，どのように語彙を修正すればＮＮＳにとって理解可能なインプットになるとＮＳが考えているかを探求するために，従来の方法論では不十分な二つ目の点である。

例えば，志村(1989：211)はＦＴのインタラクション面の修正として「あいまいさを許容する」「不意の話題変更を受け入れる」「話題の選択権を譲る」という特徴を発見しているが，これらは「自由会話」*1というデータ収集法が用いられたために観察された特徴である。自由会話では，ある話題がＮＮＳにとって理解困難であれば，ＮＳがその話題を放棄して，新しい話題に移ることが許される。また，円滑なコミュニケーションの成立を優先させるために，理解可能な話題のみを選択して会話を行なうことも可能なので，ある内容をどうしても聞き手に理解させなければならない，あるいは，伝えたいという義務や願望を，話し手(＝ＮＳ)に与えることが難しい。

情報伝達の目的を達成しようとする話し手の意識が低ければ，どんなデータを収集しても，そこにインプットの理解可能化を目指した修正が含まれているとは見なせない。「理解可能なインプット」に関するＮＳの意識の解明を目指す本研究では，インプットを理解可能にしようと意図して施された修正を確実に観察しなければならないので，ＮＳの発話の目的達成意識が希薄にならない状況を設定してデータを集める必要がある。

２．仮想講義

本研究では，調査のために「仮想講義」というデータ収集法を採用した。本章では，調査の目的，方法について述べるとともに，「仮想講義」を採用した理由を説明する。

２．１　どのようなデータを集めるか？

この調査は，日本語ＮＳが，話の内容を聞き手にどうしても伝えたいという願望や義務を持っているときに，ＮＮＳに自分の発話を積極的に理解させようとして発したスピーチをデータとして収集する。

２．２　調査の方法

素材・手順

日本語ＮＳが行った講義をテープに録音し，文字化して，考察のためのデータとして用いた。

まず，被調査者の日本語ＮＳに，「コンピューターの2000年問題」について書かれた記事（付録）を読んでもらい，この記事の内容を，留学生が受講者であると想定して講義形式で話すように依頼した。記事の内容を把握してもらうために１週間ほどの時間的猶予を与えてから，録音を行った。

記事の内容と長さは，一般の成人日本語ＮＳが内容を把握できる範囲で，しかも，工夫して語るに足る内容を持つものという基準で選んだ。

被調査者

日本語ＮＳである九州大学の教員７名（〈Ｔ1〉～〈Ｔ7〉）

*1　他に Long (1981, 82, 83), Long and Sato (1983), Terrell (1990), スクータリデス (1981, 88) などが使用。

に，被調査者となってもらうよう依頼した。７名は，外国人学習者との接触量は異なるが，全員が大学生を相手に授業を行った経験があり，講義をすることへの抵抗がないという条件を満たしている。

２．３　「仮想講義」という方法を採用した理由

第１章で挙げた「理解の成立過程と成立要因の混同」と「ＮＳの目的達成意識の希薄さ」という二つの課題を克服するために，この方法を採用した。講義というスタイルのスピーチは，これらの課題に対処するのに非常に便利な二つの特徴を持っている。

一つ目の特徴は，講師から受講者へと一方的に情報提供が行なわれ（one-way information exchange），双方向的情報交換（two-way information exchange）を行なうインタラクションが生じにくいことである。これにより，理解の成立過程が過剰に延長されるのを防止し，成立要因を特定しやすくすることが可能になる。

もう一つの講義スタイルのスピーチの特徴は，何らかの講義内容を受講者に理解させるという目的があるため，話している内容を聞き手（＝受講者）が理解していないままの状態で放棄することができないことである。この特徴を利用することにより，情報伝達を成功させようとする高い目的達成意識を持った日本語ＮＳのスピーチの資料を得ることが可能になる。

理解の成立要因が特定しやすく，高い目的達成意識を話し手にはっきりと与えることができることから，「仮想講義」は本研究に相応しいデータ収集法であると判断し採用した。

３．観察された特徴と考察

この章では，調査を通じて得られたデータを，語彙面の修正に焦点を絞って観察し，日本語ＮＳがどのような語彙の修正パターンを用いてインプットの理解可能化を図っているのかを解明する。結論を言えば，日本語ＮＳは，語彙の余剰性（redundancy）を増やすかたちの修正で聞き手に話の内容を理解させようとしているが，単純に発話を「量的」に増やすだけの修正ではなく，ある種の「質的」な修正を行うことにより語彙の理解可能化を図っていることが判明した。

被調査者のスピーチのスクリプトをベースになった記事（付録）と比較したところ，全ての被調査者のスピーチがベースの記事よりも長くなっており，発話に余剰性を設けるかたちの修正で理解可能化が図られていた。インタラクション面の修正を取り上げた研究は，インタラクション量の増加がインプット量の増加につながり，聞き手の理解のチャンスが増えると主張している。本研究は，理解の成立過程と成立要因を混同しないようにするため，インタラクション面の修正を限定した「仮想講義」によってデータを集めたが，それでも話し手（ＮＳ）がスピーチに余剰性を設け，インプット量を増加させる方向に修正を施しているということが明らかになった。

今回得たデータにおいても，インプット量の増加という「量的」な修正が行われていることが確認されたが，「量的」な修正こそがＮＮＳの理解を促進させるものだとＮＳがと考えているわけではないらしいと推測された。というのも，被調査者によって修正の個所，及び，修正の方法が異なっており，全ての語彙に修正が施されているわけではなく，同じ方法で修正されているわけでもなかった。

３．１では，「仮想講義」におけるＮＳのスピーチの特徴を語彙面から観察し，今回収集したデータに現れた語彙の修正のパターンを整理する。そして３．２では，各パターンごとに，ＮＮＳにとって理解可能なインプットを与えるためのＮＳの何らかの配慮が一定の傾向で反映されているか，それとも，ＮＳの配慮や思惑とは無関係にただ多様なパターンが現れているだけなのかを考察する。

３．１　観察された語彙の修正の特徴

調査の結果，様々な語彙の修正のパターンが観察された。その中でも，(A)繰り返し型・言い換え型，(B)意訳型・拡大型，(C)説明型，(D)例示型，(E)回避型の５つのパターンが代表的なものであった。(A)(C)(D)(E)の修正パターンは先行研究で既にその存在が報告されている。(B)については，詳細は後述するが，「仮想講義」を用いたために初めて観察することができた修正のパターンであると考えられる。

以下，例を挙げながら，修正の各パターンの特徴を説明する。

(A)　繰り返し型・言い換え型

ある語彙を繰り返す，もしくは，英語訳なども含め，別の語彙で言い換える：

「倒産」

(1)〈Ｔ5〉倒産する，倒産っていいますか会社がつぶれる

(2)〈Ｔ6〉会社はつぶれてしまう

「懸念」

(3)〈Ｔ4〉恐れがある

(4)〈Ｔ5〉〈Ｔ6〉心配される

「民間企業」

(5)〈Ｔ1〉日本の民間企業，民間企業っていうのは普通の，一般の，あのう会社

(6)〈Ｔ2〉民間企業，民間の会社

(7)〈Ｔ5〉普通の，民間の会社ですね，あのう一般の

会社

「日付」

(8)〈T1〉clock，時計ですね。えー時間…時間というよりも日にちですけど，日付

(9)〈T7〉日付，年月日，日付

「入力」

(10)〈T2〉入力すると，インプットすると

「単純」

(11)〈T4〉簡単な

(12)〈T5〉あまり難しくない

(13)〈T7〉単純でやさしい

「費用」

(14)〈T1〉〈T4〉〈T6〉お金

(15)〈T7〉経費

「一刻も早く」

(16)〈T1〉今すぐにでも，一日でも早く

(17)〈T2〉一刻も早く，すぐに…なるべく早く

(18)〈T5〉今すぐにでも…とにかく少しでも早く

(19)〈T7〉一刻も早く，早く，対応を急ぐ

「時間との戦い」

(20)〈T1〉時間が足りない，(2000年まで) 間に合わないかもしれない

(21)〈T4〉もう時間が差し迫っている…すなわち時間が足りない

(B) 意訳型・拡大型*1

ある語彙に含まれている文脈上の意味・内容を展開させている。この内容展開型の修正はある言語的表現が別の単語に変わるだけでなく，連語・節・文へと「拡大」するかたちで言い換えられる傾向がある：

「対応が甘い」

(22)〈T1〉遅れているというか遅いというか，あの甘いんです

(23)〈T3〉まだそれがなかなか進んでない

(24)〈T4〉対応が遅れていると，えーこの問題に対する考え方がま甘い，というか安易に見ている

(25)〈T5〉(対応策を) 考えていません

「対策に乗り出す」

(26)〈T2〉〈T6〉〈T7〉対策を始めました

「認識（する）」

(27)〈T5〉〈T6〉思ってしまう

「三つの不足」

(28)〈T1〉三つ，大きい問題がある，三つ足りないものがある

(29)〈T5〉三つの，不足，足りないこと…三つの問題

「重大で深刻な影響を与える」

(30)〈T1〉大変困った問題になる

(31)〈T6〉もっと大変な問題が起きてきて…

「関心（を持つ／がある）」

(32)〈T1〉これは大変な問題だっていうふうに考えています。何かしないといけないと思っています

(33)〈T4〉関心を持ってきちんとした対応をしなければいけない，と思っている

(34)〈T5〉大事な問題だと思っている

(36)〈T6〉困ったことだと思っている

「危機感の薄さ」

(37)〈T1〉関心がないっていうか知らない，知ってもそんなに大変なことだと思っていない

(38)〈T4〉実際にこの問題がどういう危機を招くのか，ということに対する認識の甘さ

(39)〈T5〉大事なことではないと思っている

「対応が甘い」という表現は，(22)「遅れている」(23)「進んでいない」といった表現に変わっている。「甘い」という表現は「遅れている」に常に置きかえられるわけではないが，当該の問題に関しては「対応が甘い」ことの直接の表れは「遅れ」となる。「甘い」は比喩的な用法であり，「遅れ」は直接的な用法で使われている。文字通りの意味を表す直接的な用法の方がＮＮＳに誤解なく意味を伝えることができるとのＮＳの判断により，比喩的な表現が回避された修正のパターンである。

この語彙の修正のパターンは先行研究には報告されておらず，「仮想講義」を使ったために発見することができたパターンであると考えられる。「遅れている」が「対応が甘い」の修正後の表現であることは，講義のベースとなるテキスト（付録）を用意することで初めて観察可能になる。「費用」を(14)「お金」に言い換える(A)のパターンは，語彙それ自体の辞書的意味から修正前の表現の見当がつくが，「三つの不足」が(28・29)「三つの問題」に，「関心がある」が(36)「困ったことだと思っている」になるように，意訳型の場合，文脈の助けがなければ修正前と修正後の意味の等価性が成り立たず，修正前の表現を推察することはできない。

(C) 説明型

ある語彙によって指し示されている社会知（世間知，world knowledge）の説明を行う：

「情報システム部門（の社員）」

(40)〈T1〉本当にコンピュータを使っている，情報システムとかいうそういうセクション

(41)〈T2〉コンピューターを扱っている社員

*1 「意訳」による修正は「拡大型」を伴う傾向が強く，今回の調査では二つのパターンの特徴を判然と区別できなかったので，本研究では「意訳型・拡大型」を一つのグループにまとめた。

(42)〈T3〉コンピューターの有用さ，ツールとしての非常なあのう能力，それを十分認識して，今の企業活動なり，いろんなものに取り組んでる人たち…実際にシステムを動かしている人たち，コンピューターを扱っている人たち

(43)〈T4〉情報システム部門，簡単に言えば，今会社ではコンピューターを使わずにいろいろな仕事が出来るということはないわけですけども，そういったところを統括している部門の，まあ統括しているというかそこで実際に働いている人たち

(44)〈T5〉実際にシステムを作っている人たち，情報システムの人たち

(45)〈T6〉コンピューターを扱うシステム部門の社員

(46)〈T7〉情報システム関連の社員，つまり，会社でコンピューターを使っている人

「有効期限2000年（のカード）」

(47)〈T1〉expireの，この日まで大丈夫っていう期限…2000年の後まで使えるカード

(48)〈T5〉2000年前までしか使えない，2000年を超えたときにえー使えるカード

(D) 例示型

具体例を示す。「説明」の一種であるとも考えられるが，「説明」が社会知の情報を直接的に語っているのに対し，「例示」は具体例をいくつか並べることにより，修正の対象となっている語彙そのものの意味を聞き手に帰納的に推測させている：

「西暦2000年」

(49)〈T1〉2000年っていうのは，1996年とか，1997年，それから2000年，その2000年

(50)〈T4〉2000問題というのは，今年が1997年なわけですけど，その98，99，2000年，というその2000年

「下二桁」

(51)〈T1〉1996とか1997とかいうのを全部入れないで，96とか97とか98とか，最後の二つ，下二桁

(52)〈T4〉西暦の下二桁，例えば97ねんだとか96とかいうふうにですね

「経営者」

(53)〈T1〉経営のトップの人，社長とか，そういうトップの人たち

「1980年代後半」

(54)〈T5〉1980年代後半に…だからまあ1985年とか1987年とかですね，そのくらい

(E) 回避型*1

話し手がその語彙の使用を回避（省略）する：

「（深刻な影響を社会に与える）懸念がある」

(55)〈T1〉回避：大変困った問題になる

(56)〈T2〉〈T7〉回避：深刻な影響を与える可能性がある

「懸念」の場合，〈T4〉〈T5〉〈T6〉は，(3)「恐れ」(4)「心配」と言い換えを行っているが，〈T1〉〈T2〉〈T7〉は「懸念」に当たる言語的表現を使わなかった(55)(56)。(55)(56)では「深刻な影響を社会に与える懸念がある」の「深刻な影響を与える」の部分にのみ言及し，「懸念がある」の意味を発話の表面に明示することが回避されている。

3．2　考察

修正の対象となるのは，話し手が以下の二つの判断を下した語彙である：

1．キーワードであること

2．聞き手にとって理解困難であること

話し手は，キーワードではない語彙，つまり，スピーチの内容を理解する上で重要でない表現を聞き手に無理に理解させる必要を感じないであろうし，また，聞き手にとって難しくないと思われる語彙をあえて修正する必要も感じないであろうから，修正を施された語彙は「聞き手にとって理解困難」，且つ，「キーワードである」と話し手が判断を下したものであると考えられる。ただし，キーワードになっていない語彙で理解困難であると思われるものについては，「回避」という消極的な修正が行われる。

修正のパターン別に，話し手であるＮＳが該当する語彙を修正する必要があると感じた理由を考察する：

(A) 繰り返し型・言い換え型

話し言葉として日常的にあまり使わないため，ＮＮＳには理解することが難しいと判断された語彙が修正の対象になると考えられる。聞き手にとって日本語が第２言語であるがゆえに難しいと思われる語彙である。

(B) 意訳型・拡大型

使い慣れている語彙でも，その語彙の典型的な用例から外れていると感じられるものは修正の対象となりやすい。例えば，「対応が甘い」という表現が修正されているが，「甘い」がこの文脈では，ＮＮＳにとって理解しにくい比喩的な表現として用いられているので，「素早い対応ができないこと」を表す直接的な表現である「遅い」の方が理解しやすいと被調査者は判断し，修正を行ったと考えられる。これも，第２言語ゆえの難しさを解決しようとした修正である。

*1　従来の研究でも，「回避」は発見されており，語彙レベルばかりでなく，難しい文法項目や話題の回避など，文法レベル，談話レベルの回避も含まれているが，「仮想講義」を使って発見した「回避」のように，回避前の表現を確信を持って推定していない。

単に使い慣れていない語彙は，語そのものの辞書的意味を言い換える(A)のパターンで修正されるが，使い慣れていてもＮＮＳの誤解を招きやすいとＮＳが判断した語彙が，文脈の助けを借りて言い換える(B)パターンの修正の対象になっているものと思われる。

(C)　説明型

このパターンで修正された語彙は，その社会知についての情報を聞き手が持っていないと話し手が判断し，その情報の欠如がコミュニケーションに支障を来すおそれがあると思われるため，修正の対象になったものと考えられる。例えば，(40〜46)「情報システム部門」が修正の対象となっているが，この語は「情報」「システム」の日本語としての難しさよりも，むしろ，「情報システム部門」とは何か，何をしているのか，どんな人が所属しているのか，といった知識がないだろうとの判断が，修正のきっかけとなったと考えられる。

(D)　例示型

聞き手がある社会知を持っていても，それを示す「語彙」の知識を持っていないと思われる場合，例を示すことにより該当する社会知を聞き手に推測させようとしているパターンである。「語彙」の知識の不足という第２言語としての難しさが修正のきっかけになっている。

(E)　回避型

(55･56)が語られる文脈で，話し手は，スピーチの内容を伝えるためには「…影響を与える」の部分が肝心で「懸念がある」はキーワードではないという判断を下していると考えられる。この語彙を修正して別の表現で言う努力をするよりは，回避する方が，聞き手に本来理解すべきところに焦点を絞ってスピーチを聞かせることができる。そのような判断の下に行われる修正である。

考察のまとめとして，図に「ＮＳがある語彙をＮＮＳにとって理解困難であると判断した理由」と「選択された語彙の修正のパターン」を結びつけたものを示した。しかし，この図は典型的な結びつきを示しているだけで，実際には複数のパターンが同時に用いられたり，(A)なのか(B)なのか曖昧で分類しにくいパターンが用いられたりすることもある。

一つの語彙に対して，一つの修正のみが施されうるわけではない。例えば(47)では，(A)言い換えが行われてから，(C)説明が行われる。

(47)より：有効期限→ expire〈(A)言い換え〉
　　有効期限→この日まで大丈夫っていう期限…2000年の後まで使えるカード〈(C)説明〉

これは，「有効期限」という語彙が，第２言語としても社会知としても理解が困難であろうとＮＳによって判断されたものと考えられる。複雑な困難さを抱える語彙には複数の種類の修正が施されうるのである。

ある修正がどのパターンに分類されるか，明確に区別できない場合もある。例えば，「深刻な影響」は当然問題を引き起こすに決まっており，(31)「大変な問題」への修正は文脈抜きでも十分予測可能であると考えれば，この修正は(B)ではなく(A)のパターンに分類されうる。また，「情報システム部門」の社員はコンピューターの操作以外にも多くの仕事をしているはずなので，(41)「コンピューターを扱っている」ことは一例に過ぎないと考えれば，これは(D)例示に分類されるべきかもしれない。ある語彙の修正は各パターン間に段階的に位置づけられるもので，ここで示した５つの修正パターンのいずれか一つにに分類されるわけではない。

修正パターンの分類を明確に区別できない理由として，次のようなことが挙げられる。(31)の場合，「深刻な影響」は比喩的な意味での用法ではないが，使い慣れていない語彙であると感じられることがある。そうなると(A)タイプの語

図　ある語彙が修正される理由

《キーワードである理解困難な語彙》
・第２言語の困難さ
　…１．使い慣れていない語彙
　　→(A)繰り返し型・言い換え型
　…２．誤解を招きやすい比喩的な表現
　　→(B)意訳型・拡大型
　…３．ある社会知を指し示す「語彙」の知識が聞き手に欠けている場合
　　→(D)例示型

・社会知の困難さ…聞き手にその語彙が指し示す社会知が欠けている場合
　　→(C)説明型

《キーワードである理解困難な語彙》
　　→(E)回避型

※「困難である」「使い慣れない」「誤解を招きやすい」などは話し手（ＮＳ）の判断

彙の修正が求められるのが普通であるが，適格な言い換えが行えないことと，文脈を利用して「大変な問題」というより分かりやすいと思われる言い方が存在しているので，修正のパターンが(A)か(B)か判然としなくなったものと考えられる。

語彙の難しさも複雑で曖昧な段階を持っているものであるため，複数の修正のパターンの同時使用や中間的な修正のパターンが使用されるのであろうと推察される。

3．3　まとめ

繰り返し・言い換え・例示・説明・回避といった修正パターンが存在していることは，ＦＴの言語的特徴として先行研究においてもたびたび報告されていた。本研究は，ＮＳが，ＮＮＳにとってどの語彙が，なぜ難しいかを判断し，その困難さの種類に見合った適切なパターンを意図的に選択していることを考察を通じて指摘した。

語彙の困難さの種類に応じて選択される修正は，単純に余剰性を増やす「量的修正」とはタイプの違う，「質的修正」である。本研究は，日本語ＦＴにおける語彙の修正の実体の観察を通じて，「質的修正」こそがＮＮＳの理解を促進する要因であるとの強い示唆を得た。

4．おわりに

本研究は，いかにすればＮＮＳにとって理解可能なインプットを与えることができるかについての日本語ＮＳの意識を明らかにすることを目的として行われ，日本語ＦＴにおける語彙の修正の実体を「仮想講義」により調査し，以下の発見をした：

(1)　話している内容を聞き手に理解させるという目的があり，ＮＳにこの目的の達成意識が高いとき，ＦＴにおいて修正される語彙には，単にインプット全体の量を増加させるだけの「量的修正」ではなく，「質的修正」が行われている。

(2)　「質的修正」とは，ＮＳが，ＮＮＳにとってどの語彙がどのように理解困難かを考慮した上で修正のパターンを取捨選択することにより，スピーチの理解可能化を図る修正である。

この研究結果に基づいて，本研究は次の仮説を提出する。

仮説：「質的修正」の方が「量的修正」よりもインプットの理解可能化に貢献する。

今後の研究で，上の仮説が支持された場合，ＦＴにおいて施される修正の中には，ＮＮＳの理解に貢献する修正があることが明らかになる。そして，そのようなＮＮＳの理解を促進する修正方略を発見することで，母語を使ってＮＮＳとのコミュニケーションを成功させるための指針をＮＳに提示することも可能になる。日本国内の多様な国際化に対応していかなければならない日本人は，今後，自らが外国語を学ぶだけでなく，日本語を使ってＮＮＳと交流していく必要性もある（水谷 1990，野本 1990)。そのために，将来のＦＴ研究には，第２言語習得，及び，言語教育の枠を越え，異文化間コミュニケーションの分野にも研究の成果を還元していくことが期待される。

【参考文献】

Long, M. H. 1981 Input, Interaction, and Second-Language Aquisition In. Winitz, H. ed. *Native Language and Foreign Language Aquisition* Vol.379, pp.259-278, The New York Academy of Sciences, New York

Long, M. H. 1982 Native Speaker/Non-Native Speaker Conversation in the Second Language Classroom. In Clarke, M. A. and Handscombe, J. eds. *On TESOL* '82 : Pacific Perspectives on Language Learning and Teaching, pp.207-225

Long, M. H. 1983 Linguistic and Conversational Adjustments to Non-Native Speakers. In *Studies in Second Language Acquisition* Vol.5, No.2, pp.178-193

Long, M. H. and Sato, C. J. 1983 Classroom Foreigner Talk Discourse ： Forms and Functions of Teachers' Questions In Seliger, H. W. and Long, M. H. eds. *Classroom-Oriented Research on Second Language Acquisition*, pp.268-286, Newbury House, Rowley, Massachusetts

水谷修（1990)「留学生と日本語教育」『異文化間教育』No.4，1990，pp.86-101，アカデミア出版会

中窪高子（1997)「日本語学習者の聞き取りにおける「修正」の役割―聴解教材開発のための実証的研究―」『日本語教育』95号，pp.13-24

野元菊夫(1990)「日本語教育と異文化間教育」『異文化間教育』No.4，1990，pp.4-20，アカデミア出版会

岡崎眸（1987)「第２言語習得の促進を目指す聴解指導―Comprehensible Input の場合―」『日本語教育』64号，pp.86-98

坂本正・小塚操・架谷眞知子・児崎秋江・稲葉みどり・原田千恵子（1989)「「日本語のフォリナー・トーク」に対する日本語学習者の反応」『日本語教育』69号，pp.121-145

志村昭彦(1989)「日本語の Foreigner talk と日本語教育」『日本語教育』68号，pp.204-215

スクータリデス，A.（1981)「外国人の日本語の実態(3)日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45号，pp.53-61

スクータリデス，A.（1988)「日本人が外国人と話す時」『国文学解釈と鑑賞』昭和63年１月，pp.118-125

Terrell, T. D. 1990 Foreigner Talk as Comprehensible Input In Alatis, J.E. ed. *Georgetown University Round Table on Language and Linguistics* 1990, pp.193-206, Georgetown University Press, Washington, D. C.

付録　コンピューター2000年問題

コンピューターの「2000年問題」についてお話しします。「2000年問題」というのは，別名クロック・プロブレムともいう，日付に関わるコンピューターの問題で，西暦2000年以降の日付を入力するとコンピューターがトラブルを起こしてしまうという問題です。

なぜこのような問題が起こるかといいますと，西暦を下二桁で処理しているコンピューターで，2000年を表そうとして「００」と入

力しても，コンピューターは1900年と認識してしまうからです。

この問題は単にコンピューターが年号を間違えるというだけでなく，もっと重大で深刻な影響を社会に与えます。コンピューターは私たちの生活を取り巻くすべてのシステムで利用されている重要な社会基盤，インフラストラクチャーです。それだけに素早い対応が必要です。というのも，この問題に対応できない企業は倒産する可能性があり，世界的な規模で経済活動に大きな影響を与える懸念があるからです。実際にトラブルは現実のものとなりつつあります。ＪＣＢなどのクレジットカード会社は有効期限2000年以降のカードを発行できなくなっています。また，2000年以降のホテルの予約ができないため困っている旅行会社もあります。

アメリカでは昨年の秋から国を挙げて「2000年問題」の対策に乗り出しています。しかしながら，日本の対応は甘いと言わざるを得ません。とくに日本の民間企業は，約７割がまだこの問題に何の対策も立てていません。日本の企業の対応が甘い理由は，企業の経営者と情報システム部門の社員との間に意識のギャップがあるからです。情報システム部門の９割以上の社員が「2000年問題」に関心を持っているのに対し，企業の経営者でこの問題に関心を持っているのは約40％にすぎません。半数以上，54％の経営者はこの問題にほとんど，あるいは全く関心がありません。企業の上層部である役員や経営者のこの問題に対する認識不足と危機感の薄さが対策の甘さにつながっていると考えられます。

日本では現在多くの企業が1980年代後半に購入したコンピューターを今もまだ使っていますが，1980年代に製造された業務用コンピューターの多くは西暦を下二桁で処理しています。そのため，多くの企業がこの「2000年問題」に直面しているといえます。

トラブルを防ぐには，コンピューター・プログラマーの作業が必要です。プログラマーの手でこれまで下二桁で処理していた西暦を四桁で処理するように，プログラムの修正をしなければなりません。一見単純ですが，この作業はそれほどうまくは進みません。というのも，修正が必要なコンピューターは80年代の古いタイプで，今のコンピューターとは大きな違いがあります。古いコンピューターを扱える技術者は少なく，そのため，人材が不足し，作業がなかなか進まないという状況になるのです。

2000年問題の解決には三つの「不足」を乗り越えなければならないと言われています。三つの「不足」とは，時間の不足，費用の不足，人材の不足，です。ＮＴＴはプログラムの修正に約40億円もの費用をかけています。しかしそれでも2000年までに作業を終えられるかどうか，時間との戦いになっています。修正できる技術者の数が限られているという人材不足のために，作業の遂行が妨げられてしまうのです。

このように障害は多く，私たちは一刻も早く「2000年問題」に取り組む必要があります。しかしながら，企業の反応はまだまだ鈍いです。問題は簡単に見えますが，対応しない企業は倒産してしまうということを経営者は認識して，一刻も早くプログラムの修正に取組まなければなりません。